福島の農業を支える人々

農業後継者
鈴木 直人（すずき なおと）さん
市農業後継者連絡協議会 監事
月の輪（鍾）農園 代表

農業従事者としての喜び、苦しみはみんな同じ。自己研鑽（けんさん）しながら安全な食べ物を作り続けます。

東日本大震災と原子力災害によって福島市の農業は、かつてない状況に直面しています。自然の恵みに感謝しながら仕事を続けてきた農家の皆さんは、先の見えない不安を解決するため、さまざまなチャレンジをしながら困難を乗り越えようとしています。「未来は、自分の中にある」と熱く語る、福島市の農業を支える人々をご紹介します。

手応えを感じ始めたところに起きた大震災。悔しさ募る一年

4年前に祖父母が営んでいた農業を継いだ鈴木直人さん。「父は会社員ですので、農業を継ぐのは自分だと思っていました。祖母が亡くなったことから本格的に始めました」。主な生産物は、ハウス栽培のキュウリ。「大型ハウスの管理は、1人1棟が目安。私と祖父と2棟のハウスで品質のよいキュウリ作りに励んでいます」。鈴木さんが作るキュウリは、味がよいと評判で、中には、直接買いに来られる方もいるそうです。「自分なりに手応えを感じ始めていたところによもやの震災。原発事故による風評被害も重なり、昨年は悔しさでいっぱいでした」。値段も下がり、ハウス内の暖房費も捻出できないような状態になったこともありました。

新規就農者が新たな仲間へ志高く共に「安心」を届けたい

現在、鈴木さんは、JA新ふくしまや卸売市場の勉強会に参加したり、自らも情報収集に努めながら安全・安心な野菜作りに励んでいます。「キュウリは、放射能の影響を受けにくい野菜のようで、ずっと不検出。ハウスの中には、もともと放射能がありませんでしたので、今は、外から持ち込まないように管理を徹底しています」

若い農業後継者の知識・技術の研鑽（けんさん）、連携、交流を目的に活動している市農業後継者連絡協議会の存在も鈴木さんの大きな励みになっているそうです。「果樹や野菜など、生産物は違っても農業従事者としての喜び、苦しみは同じです。昨年は、困難を分かち合い、励まし合いながら農業を続けてきました」

2012年春、鈴木さんたちの会に新規就農者約20人程度が入会します。「みんな農業を一生の仕事と思っている大切な仲間です。志高く、安全な食べ物作りを続けていきたいと思っています」

若い力が広く根を張り、花を咲かせ、実を結ぶ。一歩一歩力強く前に進もうとする気持ちが福島の農業を支えます。

▲祖父の直平さんとおいしいキュウリ作りに取り組む

▼鈴木さんの暮らす東部地区はキュウリの一大産地で多くの農家が生産

果樹農家
紺野 繁勝さん
オウトウ生産研究会 会長

困難を乗り越えるための探究心は常に持ち続ける。自分たちの技術を磨いていくのも大切なこと

除染、風評被害との闘い立ちはだかる困難

福島県のサクランボの収穫量は、全国第6位。県内では、福島市で特に生産が盛んです。「品質のよい、お客さまに喜ばれるサクランボ作りを目指して、日々研鑽を積んできましたが、われわれの抱える問題としては、以前から生産農家の高齢化がありました。加えて昨年は原発事故による風評被害との闘い、放射能の除染作業など、思ってもみなかった困難が立ちはだかりました」

艱難辛苦をバネにする福島の安心はサクランボから

3月、福島市内の果樹農家の皆さんは、剪定作業を済ませた後、国が示した基準にのっとり樹体の高圧洗浄などの除染作業を行い、その後、普段通り消毒などの作業に入ります。「時間がいくらあっても足りません。剪定した枝も徹底した後始末が求められます。そこが片付かないと除染作業を始められません。とにかく今は、みんなで協力しながら進めていくしかないと思っています」

艱難辛苦をバネに常に探究心を燃やし続ける紺野さん。「農業人としてのアイデンティティー※から生じる自信と誇りをもって人生を謳歌することが私の生き方です」と言います。「なぜ、サクランボが大事かと言えば、果物の収穫時期を見れば分かります。サクランボ、モモ、ナシ、リンゴと続きますが、サクランボが一番早く結果が出ます。だからきちんと育てなければならないのです」

存亡の危機にある農業を救うため、「アンテナを高くして安全・安心の果物作りを実践していきたい」と語る紺野さん。おいしいサクランボ、今年も待っています。

※アイデンティティー……帰属意識、特定のある人・ものであること

花き卸業
橋本 栄市さん
市中央卸売市場花き部
株式会社 福島花き 代表取締役社長

生産者と花屋さんを守り、消費者の皆さんに心を癒やす花を届けるのが私たちの役目

震災から2週間後にセリを再開花屋さんたちの熱気に感動

「1日も早くセリを再開してほしい」という花屋さんの声に、震災から2週間後の3月25日にセリを再開した橋本さん。「その時の花屋さんたちの熱気は生産者にも届けたいくらいの盛り上がりでした。やるべきことをやれば、結果は付いてきます」

9年前、福島市内の2つの地方卸売市場が業務統合し、「株式会社福島花き」が誕生。それぞれの市場の特性を生かし、物流と情報の拠点としてさらなる高みを目指すチャレンジは、順調に進んでいました。

「小さな困難は付きもの。いつも私たちの胸にあるのは、生産者と産地、花屋さんのこと。大震災のときもしかり。ただし、今回の困難は桁が違いました」。徐々に被害状況が明らかになると、生産地の被害の甚大さに言葉を無くしたという橋本さん。「生産者を守り、花屋さんを守り、皆さんに心を癒やす花を届けるのが私たちの役目。もう迷いませんでした」

使う土に配慮するなど生産者の努力を出荷会議でスピーチ

昨年、橋本さんは、北海道・東北や関東ブロックの花き出荷会議で、福島市の現状を話す貴重な機会に恵まれました。「土壌管理に万全を尽くし、特に土に配慮しながら育てていることなど、生産者の皆さんが今できる限りの努力をしていることを伝えました」

大震災から1年。再び巡ってきた春。橋本さんは、生産農家の皆さんの作付けが順調に進むように祈りながら元気に毎日セリ台に立っています。「私自身、皆さんが手塩にかけて育てた花にいつも元気をもらってきました。これからも皆さんと花のために最大限の努力を続けていくだけです」。橋本さんの情熱に応えるように、福島の春の花たちがつぼみを膨らませ始めました。間もなく春本番です。

◀市場では今日も活気あるセリが行われる